

第7章 原の辻遺跡出土青銅器

松本圭太

1. 銅鏃・銅製品

銅鏃は全て有茎二翼鏃である。699～701は1951年第1次調査の出土である。699はr区出土で、残長4.4m、刃部最大幅1.0cm、刃部最大厚0.6cm、重量4.4g。刃部先端数ミリを欠く。6点のうち最も厚みがあり、鎬が明瞭である。逆刺も窪み状の鋲バリを残すものの、よく表現されている。2枚の鋲型の合わせ目（範線）を茎の側面に残す。メタル部分は良好に残っており、一定方向への研ぎも観察できる。全体的に白緑色を呈する。700はpq区出土で、残長3.8cm、刃部最大幅0.9cm、刃部最大厚0.2cm、重量1.8g。刃部先端数ミリを欠く。699を全体的に扁平にしたような形態である。鎬や逆刺の表現も曖昧になっている。全体的に白緑色を呈するが、表面が剥がれた青緑色の部分が散見される。701は出土区不明。全長4.0cm、刃部最大幅1.5cm、最大厚0.4cm、重量5.9g。699や700より横幅が随分広く、身部が大きい。鎬や逆刺部分の窪みが確認できるが、全体は土錆に覆われており、鋲造痕跡等の詳細は判断しづらい。

702～704は1961年第5次調査の出土である。702はIJ区表土層出土。残長3.3cm、刃部最大幅0.9cm、刃部最大厚0.5cm、重量2.1g。刃部先端1ミリ程度を欠く。形態的には699に似ているが、厚みや各部位の明瞭さは薄れている。鎬や逆刺部分の窪みは部分的には明瞭であるが、全体は土錆に覆われている。703は第4トレーナーA区堀り上げ土内出土であり、残長2.8cm、刃部最大幅1.0cm、刃部最大厚0.4cm、重量2.0gである。刃と茎の両端に表面剥離が認められ、本来は数ミリ長かったものと思われる。幅広である701に形態では類似する。全体的に表面をよく保っており、平行の研ぎ跡を確認できる。全体は薄緑色を呈する。704は1P区表採品である。残長3.5cm、刃部最大幅0.9cm、刃部最大厚0.3cm、重量3.1gで、形態上は700に近いが、鎬や逆刺部分の窪みもおおよそ不明瞭である。また、茎が一方向に少し曲がっている。全体のおよそ半分に土錆が付着する以外は、水色に近く、700～704とは金属の質感をやや異にし、全体に摩滅感がある。

705は出土年度不明であるが、日誌の記載から判断すると、1953年第2次調査の出土品である可能性がある。長さ3.7cm、刃部最大幅0.9cm、刃部最大厚0.4cm、重量2.1g。702にやや類似した形態である。全体が緑青に覆われ、内部まで腐食されているが、鋲型の合わせ目や刃部表面の研磨痕は確認できる。706も出土年度不明である。残長1.9cm、最大幅0.4cm、最大厚0.2cm、重量0.9gで銅鏃の茎部分かと思われる。全体的に摩滅しており、断面は橢円形を呈する。2つに破断しているが、金属質をある程度は残している。

原の辻遺跡では、これまでに180点以上の銅鏃が出土している。福田一志によれば、弥生時代前期末から後期に使用された大原地区の墓域出土の銅鏃の一部には以下の特徴があるとされる（福田2005）。（I）5cmを越す身長で、逆刺は短いが鋭利である。（II）茎上部に範被関節があり、それを中心に樹皮を巻き付けている。（III）茎はかなり研ぎ出したあとがあり、六～八角形を呈する。これらの特徴を有する銅鏃は、原の辻遺跡の中でも形態的に統一性があり、本遺跡の弥生時代中期後葉の形態的特徴として捉えられることから、原の辻型銅鏃として認識されている。これらについては棺外副葬品であった可能性が指摘されている。さらに福田は、原の辻遺跡出土銅鏃全体を以下のように5区分している。A類：上記の原の辻型銅鏃、B類：A類からやや退化し、範被関節の造りが雑で

やや扁平となるもの。C類：逆刺の造りが弱く、範被関節が消滅する一方、樋をもつもの。D類：逆刺は短いが鋭いもの。逆刺は、茎の側面から削り出される。E類：茎が刃部よりも長くなる、概ね雑な造りのもの。そして、時間的形態変化については定かでないとされるものの、概ね原の辻型のような丁寧な造りのものから、範被関節や茎の而取りが退化していく、全体的に扁平になる傾向が指摘されている（福田2005）。この分類に基づけば、本報告の銅鏸は、およそD・E類に該当し、原の辻集落のなかでもやや下る時期のものであることが予想される。

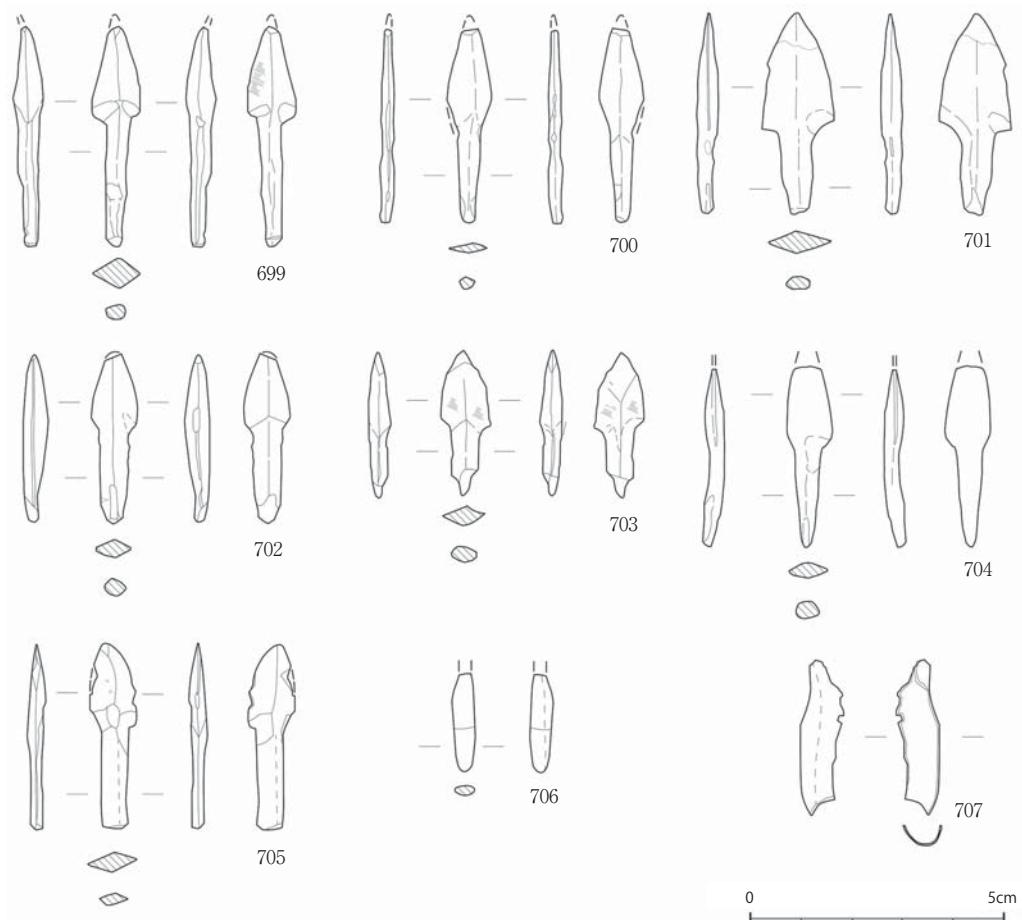


図117 原の辻遺跡出土青銅器

表5 原の辻遺跡出土青銅器観察表

遺物番号	調査年	出土区・層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
699	1951	r区	鏸	(4.4)	1.0	0.6	4.4
700	1951	pq区	鏸	(3.8)	0.9	0.2	1.8
701	1951	不明	鏸	4.0	1.5	0.4	5.9
702	1961	第1トレンチJ区表土層	鏸	(3.3)	0.9	0.5	2.1
703	1961	第4トレンチA区堀り上げ土	鏸	(2.8)	1.0	0.4	2.0
704	1961	第1トレンチP区採集	鏸	(3.5)	0.9	0.3	3.1
705	不明		鏸	3.7	0.9	0.4	2.1
706	不明		鏸	(1.9)	0.4	0.2	0.9
707	1953	第4トレンチH・I	不明	(3.0)	(0.8)	<0.1	0.8

707は器種不明の銅製品である。1953年第2次調査第4トレンチH・I区の間、地表下50cmから出土した。残長3.0cm、残幅0.8cm、厚さは0.1cm以下である。重量は0.8gであるが、土錆を含むものである。全体は歪な管状を呈し、長さに沿って半分程度が残存する。緑青に覆われる。

2. 貨泉

調査日誌によれば、1951年8月2日、第1トレンチe・f区にて、第一層土器を採取、掘り下げ中に、f区第一包含層より発見された。本層からは他に棒状鉄製品、石斧、鉄斧が出土した。発掘調査で見つかった貨泉としては、日本で初めての事例であり、学史的にも貴重である。第1トレンチf区からは、西新式土器が多く出土しており、埋没時期は弥生終末～古墳前期以前である可能性が高い。

この貨泉は、直径2.3cm、方孔0.7cm、厚さ0.2cm、重量は2.0gである。水野清一・岡崎敬による概報では、輪郭・文字共にするとどく、摩滅痕はないとされており（水野・岡崎1954）、現状でも変化はない。割れ口は全体が緑青に覆われており、内部まで金属の腐食が確認できる。

3. 現存しない青銅器

東亞考古学会による原の辻遺跡調査では、以上の他にも青銅器が出土したことが調査日誌から伺えるが、いずれも現存しない。調査日誌に基づき、出土年月日と場所を以下に記載する。

銅鏡

1953年7月31日第2トレンチQ区

銅釧

1953年8月7日第2トレンチD2区柱穴

銅鏡

1953年7月30日第2トレンチK区

1953年8月2日第3トレンチF区褐色層

1953年8月3日第3トレンチE区褐色層

1953年8月5日第3トレンチF区第7柱穴

1953年8月7日第2トレンチD1区ピット

器種不明銅製品

1953年8月8日第4トレンチT区

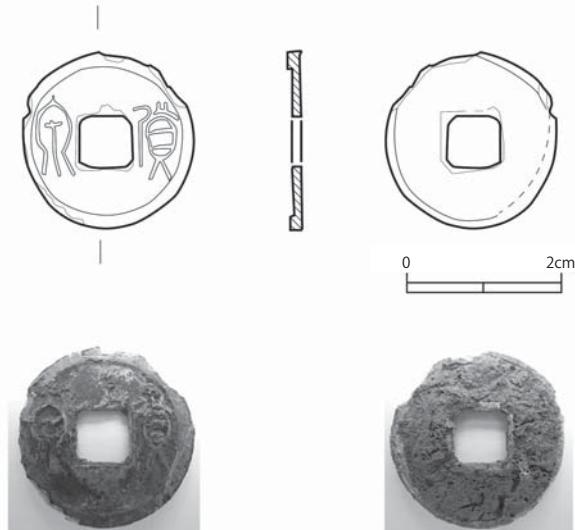


図118 原の辻遺跡出土貨泉

引用文献

福田一志2005「青銅器」『原の辻遺跡 総集編 I』長崎県教育委員会、pp.179-189

水野清一・岡崎敬1954「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』古今書院、pp.259-309